

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この段の山は「から衣…」の歌の修辞（折句・掛詞・縁語）と、旅の心細さを表す語句です。答え合わせのあと、語注と現代語訳でもう一度本文をたどると定着します。

あらすじ＝都で自分を無用の者と思い込んだ男が、友人と東国へ旅立つ。三河の八橋でかきつばたを見て、「かきつばた」の五文字を各句の頭に置いた歌を詠むと、一行は乾飯がふやけるほど泣いた。駿河の宇津の山では都で見知った修行者に出会い、都の恋しい人へ歌を託す。武蔵と下総の境のすみだ河では、「都鳥」という名の鳥に恋しい人の安否を問ひかけ、舟の人がみなそろって泣いた。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

むかし、男ありけり。その男、^①身を要（えう）なきものに思ひなして、京にはあらじ、東（あづま）の方（かた）に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人、ひとりふたりして行きけり。道知れる人もなくて、まどひ行きけり。三河（みかは）の国、八橋（やつはし）といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の^②蜘蛛手（くもで）なれば、^③橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木の陰に下（お）りみて、^④乾飯（かたいひ）食ひけり。その沢にかきつばたといおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を^⑤句の上にするて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつつ^⑥なれにしつましあれば はるばる^⑦きぬる^⑧旅をしぞ思ふ
とよめりければ、みな人、乾飯の上に涙落として^⑨ほとびにけり。

行き行きて、駿河（するが）の国にいたりぬ。宇津（うつ）の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦（つた）・楓（かへで）は茂り、もの心細く、^⑩すずろなるめを見ることが思ふに、修行者（すぎやうぎ）あひたり。「^⑪かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文（ふみ）書いてつく。

駿河なる宇津の山辺（やまべ）の^⑫うつつにも 夢にも人に^⑬あはぬなりけり

なほ行き行きて、武蔵（むさし）の国と下総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりに群れゐて、思ひやれば、限りなく遠くも来（き）にけるかなと、^⑭わびあへるに、渡守（わたしもり）、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、嘴（はし）と脚（あし）と赤き、鳴（しぎ）の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥（みやこどり）」といふを聞きて、

^⑮名にし負はばいざ言問（ことと）はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと
とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

語注 東の方＝東国。今の関東地方を中心とした、都から見て東の国々。まどふ＝迷う。どうしてよいかわからなくなる。三河の国＝今の愛知県の東部。八橋＝三河の国の地名。下りある＝（馬から）下りて座る。かきつばた＝初夏に紫の花をつける水辺の草。句の上＝和歌の各句の初めの一字。から衣＝唐風の美しい衣。「着る」を導く語としても使われる。なる（萎る・馴る）＝衣が着慣れてやわらかくなる／人と慣れ親しむ。ラ行下二段。つま＝衣の「褌（すその左右の端）」と「妻」。駿河の国＝今の静岡県の中部・東部。修行者＝仏道修行のために諸国をめぐり歩く僧。読みは「すぎやうぎ」。うつつ＝現実。文＝手紙。武蔵の国＝今の東京都・埼玉県あたり。下総の国＝今の千葉県北部・茨城県南西部あたり。古文での読みは「しもつふさ（しもふさ）」。「現代の地名としては「しもうさ」と読む。すみだ河＝隅田川。渡守＝渡し舟の船頭。鳴＝くちばしと脚の長い、水辺にすむ鳥。名に負ふ＝その名を持っている。名にふさわしい。言問ふ＝尋ねる。こぞる＝そろってゝする。全員がゝする。

A 語句の意味と読み (1～5)

- (1) ① 「身を要なきものに思ひなして」の「要(えう)なし」の意味を書け。
- (2) ① 「身を要なきものに思ひなして」の「思ひなす」の意味を書け。
- (3) ② 「蜘蛛手」とはどのようなようすを表す語か、説明せよ。
- (4) ④ 「乾飯」とはどのようなものか、説明せよ。
- (5) ⑨ 「ほとびにけり」の「ほとぶ」の意味を書け。

B 文法 (6～10)

- (6) ③ 「橋を八つ渡せる」の「る」を文法的に説明せよ。
- (7) ⑦ 「きぬる」を文法的に説明せよ。
- (8) ⑧ 「旅をしぞ思ふ」の「し」はどのような働きの語か。
- (9) ⑧ 「旅をしぞ思ふ」で、文末の「思ふ」が連体形になっているのはなぜか。きまりの名を示して答えよ。
- (10) ⑬ 「あはぬなりけり」の「ぬ」の文法的意味と活用形を答えよ。

C 主語・指す内容・敬意 (11～14)

(11) ⑤ 「句の上にすゑて」とあるが、このように歌を詠むよう求めたのは誰か。

(12) ⑪ 「かかる道は、いかでかいまする」は誰の言葉か。

(13) ⑪ 「いまする」は、誰から誰に対する敬意か。

(14) ⑮ 「名にし負はば」の「名」とは、何という名のことか。

D 口語訳 (15～18)

(15) ⑨ 「ほとびにけり」を、主語を補って口語訳せよ。

(16) ⑩ 「すずろなるめを見ること」を口語訳せよ。

(17) ⑪ 「かかる道は、いかでかいまする」を口語訳せよ。

(18) ⑬ 「あはぬなりけり」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (19～22)

(19) ③ 「橋を八つ渡せる」とあるが、その土地が「八橋」と呼ばれた理由を、本文に即して説明せよ。

(20) ⑥ 「なれにし」の「なれ」には二つの意味が掛けられている。それぞれ説明せよ。

(21) ⑭ 「わびあへる」から読み取れる一行の心情を、十五字以内で書け。

(22) ⑮ 「名にし負はば」の歌で、男は都鳥に何を尋ねているか。本文に即して書け。

F 文学史・修辞 (23～28)

(23) ⑤ 「句の上にするゑ」とあるように、各句の頭の文字を続けると一つの語になる修辞技法を漢字で書け。

(24) ⑤の方法で、この歌に隠されている語をひらがな五字で書け。

(25) ⑥ 「なれにし」を含む「から衣…」の歌には、「から衣」と関わりの深い「着る・なる(萎る)・つま(棲)・はる(張る)」が詠み込まれている。この

修辞技法を漢字二字で書け。

(26) ⑫ 「うつつにも」には、すぐ前に出てくる地名と同じ音を利用した掛詞が使われている。掛けられている二つの意味を書け。

(27) 『伊勢物語』のように、和歌を中心にして、その歌が詠まれた事情を短い物語として記した作品を何というか。漢字で書け。

(28) 『伊勢物語』の主人公である「昔、男」のモデルとされる、平安時代初期の歌人は誰か。人物名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「から衣…」の歌は修辞の三点セット 各句の頭を続けて「かきつばた」＝折句、「なれ・つま・はる」＝掛詞、「着る・萎る・棲・張る」＝縁語。技法の名前を漢字で書けるようにしておく。 ②「きぬる」と「ほとびにけり」「きぬる」＝力変「来」の連用形「き」＋完了「ぬ」の連体形(下の「旅」にかかる)。「ほとび」の主語は人ではなく乾飯。訳と文法の両方でねられる。 ③「いまする」は尊敬語 言ったのは修行者、敬われているのは男。あわせて「うつつ」＝地名「宇津」＋「現実」の掛詞もセットで覚える。